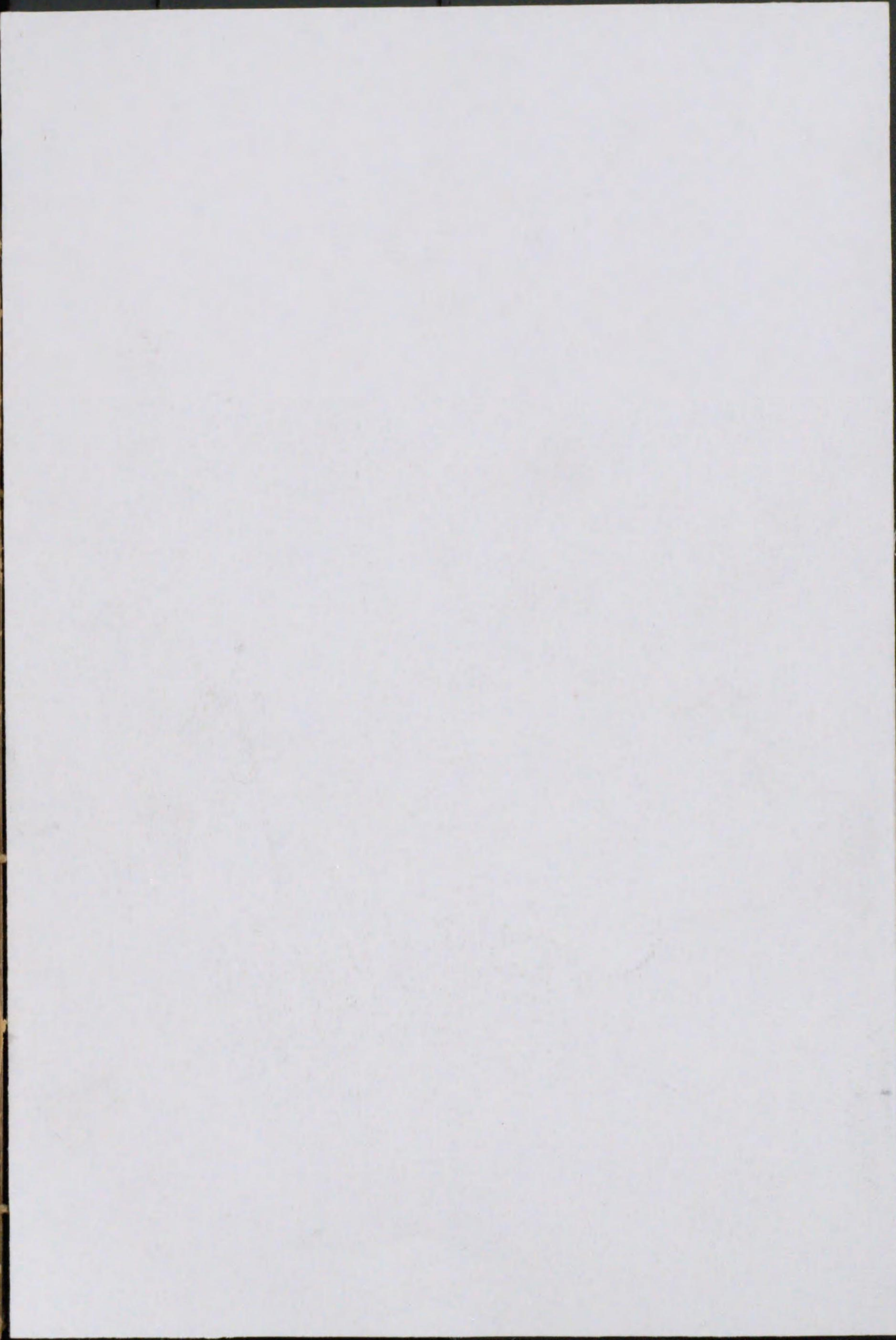


藝文  
書  
雲室隨筆

198  
430

198-430  
\*1200800013595\*

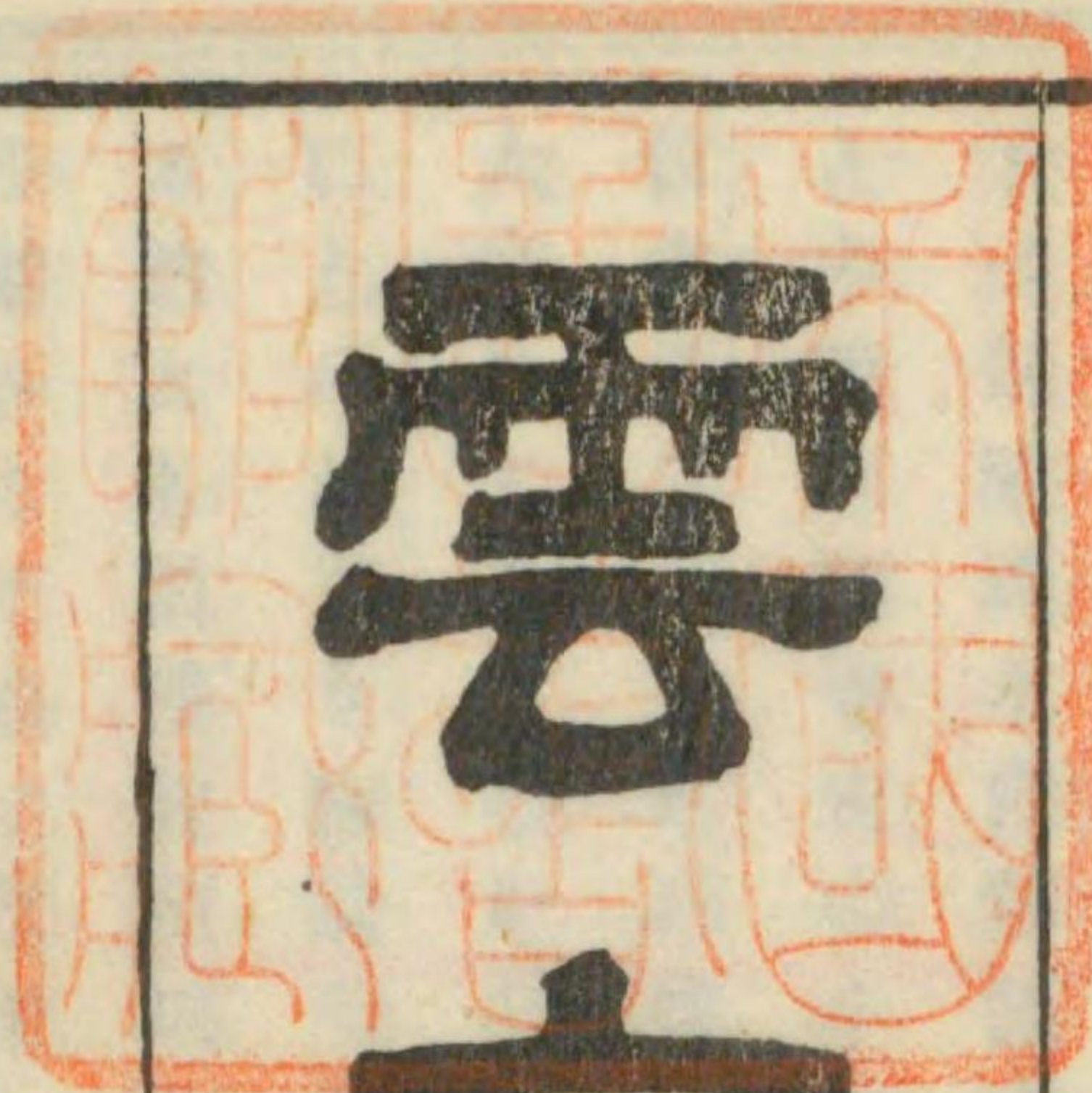
國  
書  
藏



雲室隨筆

198-430

雲  
室  
隨  
筆



大正  
12. 8. 7  
購求

雲室隨筆

雲室隨筆

雲室上人著

予は信濃國水内郡飯山といへる所本多豊後守殿在所にて愛宕町光蓮寺と申西本願寺末の小寺に生れたり元來此光蓮寺は甲斐の源公右京大夫信虎の二子左馬亮信繁の子左馬亮信豊の庶子にて勝頼父子滅亡の時五六歳にても有しか三枝三郎左衛門と申者に伴はれ亂を避て信州更科郡にしひ來り鹽崎の里康樂寺といへる西本願寺末のありしに頼み寄ける然とも前後皆敵地となりし事なればしのひ遂へきにもあらず康樂寺の勸めにて終に落髪し三郎左衛門も俱に入道し康樂寺の取持にて順如上人へ謁し其時光蓮寺と云る號を賜り是より長く末寺となる鹽崎の里のうち灰塚といへる所に纔かなる一字を建て居けるか其後所々に移住

し飯山に移りたりと云開基は正善といひしと予は正善より十九世になれり然るに予生質虚弱にて幼少より病のみ多くして父母のあはれみ格別に深かりき兄弟五人有しか三人は女子にて予と弟なる者二人なり予既に十四五歳なれとも兎角快き日はすくなく打臥日のみ多かりき其頃は鄰國越後に學者多しとて皆行て學事にて有しか同し年ころの友か年々の様に行けとも予は多病なれば父母のあはれみ深く素讀手習までも等閑かちにて過ぬされとも朋友の年々學問にとて行しか去年はこれを學ひたり今年は又それをと云を聞ことに浦山敷て父母に行ん事を乞とも其多病にて行へきやはとて許し給はす同し年頃の友の歸りてはかれこれと咄すを聞又人々の彼の寺の新發知こそ才子にて學問もすゝめり是兒こそ能き覺えなりなと噂するに付ても我身の多病なる事のうらめしくて死しもやしてん抔思ふ事さへ度々なりしか鄰寺なる稱念寺とて

東本願寺末のありしその二子にして自天上人と呼ばれ久敷京都にて學問せし人なりしも人前もならざる業病にて人に逢す引籠り居られしをせめてもにと日々訪行き枕邊に寄り居て彼れ是れと尋ね聞えしに此人世典を好み京都にして河野齊林周助などに學はれしと云ひて病床なからも深理なるものこそ見給はされ詩文集の類は病裏の保養かてらにぞ讀居られける故予もいつしか世典を學度おもひたちて自天上人に問ひたりしかは儒典の事は江戸に如はあらし今も彼是豪傑多と聞と咄されしかそれより頻に江戸に遊びたく思へとも父母の鄰國へたも行事を許さねは況や江戸などは存もよらぬ事にて有へしと思ひ十七歳の春善光寺邊に親類のあるに參りこんと云しに父母も保養の爲にもよかるへし十日許も滯留し來るへしと年頃なる僕に能申付やられたりさて親類へ行一兩日過て幾日頃迎に來へしとて僕をはかへし親類へはどこそこの人

こそ久敷友なれば訪來んなと欺き唯一人にて行き來の人に尋問て江戸に出たり其頃光蓮寺檀家の者神田久右衛門町といへる所に福田屋藤右衛門といひて餅屋のありけるに尋ておち付けるさて學問の事それの先生はと尋ければとも大都の事町家などの商賣のみの者は一向にしらす湯島の聖堂といへる所こそ學問する所と承る抔と申のみなり然は先づ豊後守殿屋敷へ參り又々聞合見んとて長田馬場の屋敷へ行續縁の者にて尾上宗左衛門といへる人ある故相談せしに此人の申は松平出羽守殿御屋敷にて宇佐美惠助といへる人こそ當時高名の學者なれと承り候よし咄されたり兼て自天上人の尊せられし人に聞及し故何卒紹介をと頼しに幸ひ宗左衛門弟進士仙藏と云る者の妻の兄弟の出羽守殿家來有しに宗左衛門直に行て頼み呉ける其人内田三郎左衛門といふ人なりしか早速惠助へ右之段頼込吳惠助承知いたされて三郎左衛門同道にて參

りたり惠助名惠字子迪瀧水と號し徂徠翁の門人にて其頃七十近き様にみえたり其より日々神田久右衛門町より赤坂御門内出羽守殿屋敷までかよひたり然とも子迪も老先生といひ殊に大家の事故初入のものには教も届きかぬる事なりしか彼是知る人の出來て中にも角田市左衛門名明字公熙青溪と號其子彦市名彦字祥邦と云し其弟兵十郎名彪其外知る人も段々出來ければ年來の望もかなひし様に喜び思ひしか兎角に父母の案事て頻りに歸る事を催促せらるゝには如何ともすへき事なかりき又其頃上野の下谷に入江與左衛門といへる人あり南溟江忠園の養子にて名貞字子實北海と號此人へ紹介せし者有て此方へも行て學たり然とも父母の數々歸れと云ひ檀家の案内知りたる者をもて迎にこせし故是非なく一先歸りたり出し年は安永二年の三月なりし其翌々安永四年の八月歸りたり其翌安永五年九月九日に字子迪先生は物故せられたり扱

故郷に居たりしうちに自天上人も遷化せられし其後は又京へ行て本寺の學寮へ出しか弟なるものも名惠洞天山と號せり一所に在し故其年は俱に歸れり其後又江戸へ出たりしか此時は石町四丁目に森彦右衛門名鎮字大年東郭と號し此人易經に名ありとて人々の行に頼みて暫く易老莊など聞しか其後八代巢河岸の林家の學寮に山川辨右衛門名純方字子坤といふ書生有しに頼みて林家出入の事を願ひたり其時の祭酒は内記殿とて十七八にて未だ任官前にておはせし辨右衛門家老の長坂徳左衛門といへる人へ申入吳たりし故徳左衛門學頭の松臈へ申たり先生名脩齡字君長松臈と號す世名關永一郎とて林家三世の學頭なり頃しも秋の釋菜なりしか釋奠拜見に參り居たりしに釋奠畢りて松臈廣業堂にて逢へき由辨右衛門より申せし故直に廣業堂へ參り先生に逢右之旨頼みければ先生承知被致其後日を卜し束脩を取り祭酒へ謁し廻門人同様と申

事にてそれより頻りに林家へ出入聖堂へ行學友多くなりたり其時は八代巢河岸は松臈聖堂は學頭なし薩摩の書生町田長右衛門岩城善助大場五兵衛三人の者預り居ける入塾の人には御牧一十郎田中庄助鈴木作右衛門平井直藏新山健藏工藤猶八など彼是十二三人も居けりさて市川小左衛門といへる人名世寧字子靜西野と號自ら松臈の門人と稱して桶町邊に居られしか當世の詩人にてありし松臈此人を進めて吾と同じく學職とせられ聖堂へ引移られたり其頃酒井雅樂頭殿浪人とて結城唯助といふもの入塾せりさて世の中變る有様は大小同じ事也當時田沼主殿正殿執政其勢ひ諸大名諸旗本輕き御家人に至まで勤さる者なし然るに松臈年頃主殿正殿へ被召參られけるか權家の風としてあるとき主殿正殿松臈へ被申は年來被參殊に嫡孫隆助も師範に預り辱存若官儒杯望に候は、如何にも取計可申と被申故松臈も有難事奉存候と被申候に付然

は大學頭方へも聞合可申と也此時祭酒林信徵不幸被致諡世良先生と申道春より七世にして血脈絶たり當祭酒は富田能登守殿二男を迎て繼けり此祭酒温順なる人にて有しか實家に同居之時學問好きにて市川小左衛門參り指南致されたり然るに主殿正殿より松惣之事祭酒へ沙汰有しに付祭酒右之段小左衛門へ被申たり小左衛門も師家の事なれ共松惣權家の勢を借て祭酒を輕せられ候様に被存又祭酒も廿一二の人殊に林家國初以來始而他家より繼し事彼是以折悪く祭酒も小左衛門も如何とも難被申書生も一同に皆疑敷存居予其時は小左衛門日本詩紀を活板に致されける手傳に參り居けるか右之段小左衛門被咄故甚氣の毒に思ひ居たりしか其内に田沼主殿正殿父子逝去被致松平越中守殿執政被致御政事萬端改りたり然るに越中守殿存寄として京都より柴野彦輔被召出官儒となり又岡田清助と申す者駿河臺邊小普請衆の二男にて有りしをも

被召出けり是は山崎闇齋風之由なり扱彦輔元讚州の書生にて先年聖堂入塾致し四五年も居られける其後京へ參居けるうち松平阿州候文學となりけるが此度上より被爲召事になり萬事阿州より世話被致罷出けり松惣は田沼主殿正殿へ入魂に出入せし事疑敷相成林家四世の學職被勤けるを廢し其上離門被致ける小左衛門も學職を止られ淺草邊へ引移らける松惣は虎の御門外松平藤十郎殿地面へ引移住れたり兩學頭如此一度に廢せられし故聖堂の方は安原三吾八代巢の方は平澤五助申付られけるが又祭酒林信敬不幸被致其後は松平能登守殿公子熊藏殿蕉隱公子とて人も知たる人なりけり是を迎て繼ける松平越中守殿御指圖と申事なりさて當祭酒となり林家又萬事改り學頭平澤五助も異學と申事にて職を止られ神田お玉か池邊へ引移安原三吾は藤堂佐渡守殿文學となり彼屋敷へ引移れり依之八代巢の方は鈴木作右衛門後に片瀬と改學頭被申付聖



堂は平井直藏と結城唯助今犬塚と改む兩人へ被申付又越中守殿計として京より尾藤良助と申者被召出彦輔同様新地二百石被下世道世話可致様被仰渡聖堂へ罷出此者元來伊豫の産にて初は皆川文藏門人なりしか後大坂へ下り片山忠藏門人となり後自ら古學を棄て宋朝學を勤め獨立せし人なり又其後古賀彌助と申す者京都より被召出良助同様被仰付是は京都にて西依義兵衛とて高名の人の高弟の聞え有し者也祭酒は蕉隱公子と申て實家に居られし時は詩文杯達者にて風流のみ名の知れし人なれば林家風の學者にもあらず然は平澤五助などを異學とて廢せられけるが何を以て正學と申事なるにや平澤を異學と申さは良助も彌助も皆異學なり柴野彦輔相談と申事にて春齋以來七科の學式改られたりしかれは林家の學風も異學と申事にや 神祖以來道春の學御信厚の處皆改り山崎風の學者多くて道春の血脈と共に學風も絶たりけりさて其後祭酒

の存付にて聖堂書生扶持百口被差上相州の聖堂修葺料千石を本地に合て頂戴被致入塾之書生は扶持取上之事故皆退塾被申渡以來聖堂皆上之御手當に相成官人の子弟の外入塾相不叶事になりたり又近頃には聖堂文庫の書是は神祖已來道春春齋へ被下候書なり是又不殘上へ被差上たり萬事如此皆草りたり予光明寺住務以來も不相變祭酒へは年始時候等は罷出候得ともむかしとは皆事かはり八代巢に學頭といふものも無之聖堂には良助彌助罷在て學頭と申もの外になしさて聖堂御再興之事被仰付候處祭酒より申上られしや又彦輔良助彌助申上しや水戸殿へ被仰朱舜水の致し置れし明の學宮の雛形にて御再興なり三萬石已下大名十一人へ御手傳ひ仰付落成致せり

宇佐美惠助と申人は其生質篤實にて師の教をかたく守り著述も多く有之四家雋校考を始め古文矩輔儲篇王注老子同異絶句解考證なとなり元

來篤實の人故考證すきにて四家雋徠集皆考證有其うち古文矩の考證は先生歿後門人本田庄藏と申もの出板致せり予ある時先生に何なりとも書被下候得と乞ければ嵯峨に遊といへる五言律を草體にて書て與へられたり持歸り朋友に見せけるに皆云には先生に書を乞へは皆此詩を書て與へらるゝなり我等も持り彼等も持りとして書體も皆一樣の草字にて有けり其後心付て見るに書を乞ほとの人には幾人にも皆此詩を書體も變せず書てやられたり常に咄されしは我等は鈍き生れ故常々徠徠に學問やめよくと叱られたる事度々なりき春臺といふ人心切の人にて大に世話し吳られし杯と被咄けり又あるとき予先生の號の瀧水と申はどこぞの地名にても有之候やと問ければ瀧の字むつかしそうな字故誰もおろ／＼問事なり我は上總の國夷水郡イシの産なり夷水古往瀧水と書せり故に是を號とせりと被申けりその頃子迪の門には豊島終吉中川源助

藤山五郎兵衛村山新兵衛御牧一十郎本田富之助後庄藏杯名有人多かりき入江與右衛門後八と云幸と云人下谷車坂下と申處に居られし羽州秋田の産にて南溟江忠囿の養子なり生質心切に書生を世話被致候人なれとも殊の外短慮なる人にて常に門人を叱られける一日富士山紀行の文を見せられしに讀たがへ有ければ殊の外に怒られ中頃まで讀たりしを取上手に持なから居間へ入られし事杯も有けり著述は荀子の君道編の解滄浪詩集の部南溟の集なり杯なり後藤堂和泉守殿文學となり屋敷へ引移られたり一子千十郎とて父祖の業を繼藤堂にありて學問も大に進たりと云森彦右衛門といふ人石町四丁目新道に居られし易經に名有とて人々の行ければ予も頼みて行たり其見老莊は易經の注の注と申事にて外に見識有とて自ら一家と稱せられけり然とも臆説の多樣に思はれたり著述は易道撥亂辨黃庭經板に乗せられけり後非辨道非辨名といふもの板

に乗せられし時予申すは御見識可然候得共流行に後れし事なり止み給へと申せしかともむかしかたきの人故終に板に乗せられしか果して其中におかしき事共ありて笑をまねかれたりし塚田多門と申人は予が郷人にて善光寺の産なり元淨土宗の僧となり増上寺の學寮に居られしと云還俗して儒生となられし始て居を湯島天神切通にトせられしか予其時尋行たり古郷の咄抔いたし歸れり其時は大峰先生と號大學國字解中庸國字解など出されし後麴町平川天神前通へ移られ冢注大學冢注中庸冢注論語冢注家語荀子斷抔數多出されけり細井甚三郎世話にて尾州へ被召出其後は貝坂へ引移られたり生質心切なる人にて能書生を世話被致ける松臆君長先生は林家四世の學頭にて今世の大家なり誰か此右に出るものあるへき生質剛直の人にて其學究めざる事なし常に云るゝ様人間百

歳の壽を考るに十四五迄は論なし二十歳已後より書もそろゝ見得らるゝ物なり然は百歳のうち先つ二十年引ときは残り八十歳なり又其内夜も九つより引三度の食事の隙二便の用人間中の交の義理の勤め彼是指引時は八十年の内漸三十年はかりの學問なりそれに皆長雜談し遊山郊行し空光陰を費し學者にならんとは無理なりと被申ける我等も折々此言を聞ては恥入て歸れり學頭の時分時候見舞などに行に未明より机により夜九つまでは座を離れざる様子なりあるとき五月末頃文選會讀の日參りしに朝四つ時より始り辨當を遣ふか休みにて日の暮まで休みなし燭を取頃皆々後會を期して歸れり予生虛弱故根機も殊に薄ければ大に難澀之様に覺えり何れの會も如此なる故膝下に在る者進まさる事なし然は當時何れの大家と申人誰か如此豪傑あらん然とも古昔より衆に秀るもの嫉を受る事多は歴史に記せし如し必竟先生も衆に秀られし

故か衆人の嫉みに逢れし事なり予か往來する學者知るも知らざるも松  
牕を信し恐れざるはなし戸倉作助といふ人郷人にて信州上田の産なり  
後中川修理大夫殿文學となれり此人常に松牕を鬼なり人間中を出し人  
なりと雜談せられたり著述は皆近頃の作なり國語略説、戰國策高注補正、  
何れも萬古の眼目を開かれしと云へし寛政十二年庚申先生七十四性心  
益健なり書經の古經合注と申ものを著述被致、板行下皆自筆なり、且注小  
字數行なるを灯下にて淨書せらる予申は板下は筆工にても可然候哉と  
申ければ先生被申様筆工に申付ても亦一々跡より見て誤字をなほし申  
さねはならぬなり然ときは二度手間なり自身にすれは誤りなしそれさ  
へ板彫の損さすゆる隙さへあれは自ら淨書するなりと申されたり其精  
力何人か如此ならん眞に豪傑と申へし殊に林家四世の學頭にて有し故  
道春春齋の學風今の世松牕より外知る人なかるへし

旭山澤元愷字悌侯先生世名平澤五助山城國宇治の人なり古昔宇治兎道  
と書せり依て人皆兎道先生と稱せり此人秀才之人なれ共其質甚短慮に  
てありし文を以世に知られたり文章は實に拔群と可申然とも生質右之  
通之人故自身に應する才子ならざるよりは喜はす才なき人をは甚敷惡  
み叱罵詈せらるゝ故人親ます厭惡するもの多し予も常に芥の如くに罵  
詈せられたり然とも風流は實に天下一人と云へし事は著述の漫遊文章  
にて人の知る所なり初聖堂の學頭被勤けれとも右之通故書生更に不親  
殊に頻に惡み時々祭酒へ訟へける故學職を止られけり又後に八代巢の  
學頭被申付し時は彦輔良助の存寄にて異學と申立被止たり所々移住せ  
られしか神田お玉か池に御旗本地面に居をトせられしに此先生癩の持  
病ありて平生難義せられけり餘りの事にや瓜蒂の末を吞れしに水をし  
たゝか吐れたりし甚こゝろよくやありけん予芙蓉の方へ行嘶し居たり

ければ書中にて此間年來の癩治し宿病頓滅甚快然なり御喜被下と申來りし故それは仕合せなる事哉と申しけるが其翌日苦痛もなく終られたり

市川小左衛門西野先生といへるは上野國の産にて一度同國九峯山人高橋

九郎左衛門の養子となられしが其家を離別し江戸に出て業を立られ桶町邊

に卜居し専ら詩を以て世に名有林家の門人となり自ら松牕の弟子と稱して師事せられしが聖堂都講しばらく闕し故松牕是を祭酒へ進めて學職に擧られたり此人詩人なれば日本の詩の逸するを集めんとて文武帝より始り後醍醐のあたりまでを一部にせんと段々日本の書を集められて皆々筆記せし予も手傳に頼まれ日々筆記し先一部六卷と成て活板にせられたり其序に自身の詩を一部二冊活板にて摺られし寛齋摘草と題せり予も一部もらいて持たり其中に四不忌の詩とて四首あり松牕に師

事せし詩其一也其序文を新山健藏名質字休文といふ人書けり其文にも小左衛門松牕に師事すと書けり如此篤行の人也しか如何なる故か松牕と間出來て其中に越中守殿執政に相成唯々異學と云ふ事になり終に松牕も終身禁固同様になり自身も學職を止られたりあわれ此時松牕學職にて居られたらば道春の學流絶ゆる事なかるべきに是に至れるも亦命なりと謂つへし小左衛門後に松平出雲守殿臣吉村順左衛門推舉にて富山の文學となられたり予此先生と親しき所謂は學頭の時予中山道上尾宿にて郷學館建立せしに誰も世話し呉るゝ人なかりしに此先生萬事引請世話致し呉られたり本此郷天滿宮の社跡にてありし所へ建朱文公と天滿宮と配食し祭酒信徵祭酒世良先生より二賢堂といふ額を被贈遷坐の時も先生態々來りて式を定め遷し奉り釋奠の式をも定められ度々上尾へ被參首尾能郷學相成けり皆此先生の蔭なり著述は古五絶五冊日本詩紀六冊

寛齋摘草二冊詩家法語一冊詩は實に敵するものなき人なり  
太室孝徳字子章先生世名澁井平左衛門此人林家四世の書生にて人皆信  
伏し大家と稱せり禮に委しとて名有下總佐久良侯堀田相摸守殿文學に  
なられたり著述は三禮略圖四冊あり其外板に乗せざる物數多あり予東  
西南北飄然たる故人予か居所も定めず諸名流の間に遊ひける故雲の如  
く無心なりと笑ける故自ら雲室と號し松牕へも文を乞西野へも詩を乞  
其外諸方の知れる人に皆詩文を乞たり此先生へも此事乞ければ承知被  
致けるか其後松牕へ参りたりしに太室は學頭寮の鄰に居られし故歸り  
に寄可申よし云こされたりし故行しにしかも其日は會讀日と見えて人  
大勢参り居たりけるか小坐敷へ通し太室被申は先達て御頼みの雲室の  
作出來たりとて出し與へられたり開てみれば雲室辭とあり然とも草體  
にて書れければ予讀兼る故先生に問しに先生一二行讀れけれども先生

も讀めず先生申されけるは別に楷字にて文艸に留置たり後日來て讀給  
へとて入られける故予も先辱と厚く謝して持歸りぬおかしき事なれと  
も先生草體にて書て見たくや思はれけん平生覚えさる草體を草書韵會  
草露貫珠杯にて見出し認められし故程歴ては元より覚えさる書體故わ  
すれて讀めさりしと見えたり

鶴鳴市川匡字子人先生世名多門といふ人もと高崎侯の臣なり四方に遊  
學せられて初熊耳翁の門に遊ひしか後信州に行夫より尾州名古屋御園  
町といへる所にしばらく卜居せられたり予廿一二の時京都へ遊學せん  
と一人にて出たりしか足に任せて山水にすさみ雅友を尋て行ほとに二  
月中旬に古郷を出しに漸四月上旬に尾州に行たり兼而先生の事聞及し  
故尋ねて一宿し話せしに先生被申は坐下何の爲に京都へ行るゝそと訪  
し故學問の爲なりと答ければ先生被申は夫は學問に托して遊ひ歩くと

いふものなり今日まで古郷を出て數日の間遊はれし咄なるか其内學問  
出來候哉一も益は有間敷なり方今天下太平の世なれば一生涯遊ひあり  
きても遊ひに事はかゝぬ世の中なり短き命を持って何の時か此損を取  
かへさるゝそ若彌學問の心懸實ならば早々京都へ行日月をむなしくせ  
られそと申されけるかその一言實に膽に通し辱かりし此時先生一子を  
生せられし時なりそれより京都へ出て本寺の學寮にて一夏勤學せり後  
先生も又名古屋を去て京都へも出られしと聞ける予寛政四年西の久保  
なる光明寺に住務して後寛政六年の春梅溪會始に招かれ行しに高崎侯  
の臣菅谷喜兵衛松夢山人に逢て互にこし方の話せしに風と鶴鳴先生の  
事を話せしに松夢被申はそれは奇なる事哉其市川子人こそ去々年吾藩  
へ召返され今八代巢河岸の上屋敷に住居せり其事を咄しなは定めて喜  
はれんと申して別れぬ其翌日予八代巢河岸屋敷へ尋けるに先生留主な

れは申置て歸れり其翌日先生二子新二郎を召連れて尋來られ久々にて  
逢大に喜び過し事申出一言の教の辱きを謝したりける先生被申は我も  
久々にて都下へ歸りし故知己の者は大方死たりしを今思はずも上人に  
逢て一知己を得たり是よりは生涯通家の交りと存と甚喜び歸られたり  
今年予住職御禮に上京いたす故先生へ暇ごひに行寛々咄しけるに先生  
被申は早く歸られよ又むかしの病の出ぬ様に杯と笑て別れぬ三月八日  
に發足し六月下旬に歸り早速先生へ行しに先生此間風邪にてありし外  
邪を遣事の遅かりしにや退兼て兎角快からすと病臥し居られけるか禰  
申様上人我を尾の名古屋に訪れしは已に十八年なり其時一子を生せし  
か今聖堂へ入塾させ置たり此節看病に參り居れりとして引合されたり禰  
太郎是なり扱一つ二つ咄うち先生被申様人死生命あり皆天也我も早知  
命を過ぬ若死なは願くは上人の後園へ葬り呉られよ春上人を訪たりし

時よく見置たり尤我先墳墓は御同宗の寺にて早稻田里南春寺に有とも  
濕地故心よからす且住僧野にして我常に厭ふ所なり朽體固より惜むに  
はあらね共願くは知己の人に托せは心よからんと被申故予申すらく隨  
分承知致せり早く全快して寛々地を見置給へ杯と笑て歸りぬ然るに七  
月七日の早天に禎太郎參られ家翁養生不叶今朝落命せり其の逝に臨め  
るや我に被申るゝは此間光明寺の來られし時葬りの事を頼み置たり必  
す彼地に葬可申と遺命せらる因て來れり幸に上人約を踐みて後園に葬  
り給へかしと予乃ち大に驚けり噫先生前日の言を顧みるに死生に安す  
るは大賢にあらざるよりはかたし又先生於予一字の教こそなけれ十八  
年前一言の教は於今不怠實に萬古の知己なりといふへし然とも右京亮  
殿は當時寺社御奉行なり勝手次第に葬る事御法なりかたし況や御奉行  
なれば尙さら致かたけれとも多門遺命の事君侯も被爲聞し故南春寺へ

は生日に落し齒を棺に入れて葬り南春寺より多門願に付分葬承知之書附  
を取替し七月九日子か後園へ葬りたり則ち碑を建て鶴鳴市川先生墓と  
題し碑陰の銘は先生の尾州にての門人鳴海の人江損疾なる者の文也書  
は熊耳翁の孫遠山孫藏なり此人又先生の門人なり先生著述數多あり易  
禮莊子其外文集なり莊子は禎太郎より借寫し置り甚卓見なり讀莊子と  
題す門人には清水權助駿州藤枝侯本多伯の文學にて著述も達者なる人  
なり渡邊八郎信州飯田侯堀大和守殿文學なり其外尾州遠州の間彼是門人多  
しと云

畫師諸葛監字子文清水又四郎なるものは生質剛悍なる人にて古畫を集  
め力を盡して修せしと云元來富めるものにてありしか家産を破りて畫  
を修せりとそ然とも剛悍の性故己を屈する事ならず人をも容れず人に  
も容られさりき所々に移住しけるか予は中村彌太夫と同道にて初て訪



たり其時は淺草觀音地中お多福辨天の地面に居たりそれより心易くなり後には子文も舊相識の様に覺えたり其畫を見るに一石一水といへとも華人の畫せしに法せずといふ事なし因て其畫甚拙にみゆれとも其守る事の固なる苟も己よりせしは一もなし然とも其生質諸侯貴人といへとも己をまけて屈する事なき故生涯窮困のみ多かりき寛政二年七十四にして歿せり予其時は甲州に遊ひて子文翁の死をしらす光明寺に住務せし翌年其子庄松藤代屋伊助と同道にて父の遺書を持來れり開て是を讀にさはかり剛かりしも子には心の引るゝ者かとあはれにかなしかりき其書に曰重病老衰存命無覺束奉存候上人御住所承合候處此節遠方へ御遊被成候と申事生涯の拜面難期奉存候御存知之通舊來の門人も有之候得とも存寄に相叶候ものも無之跡々之儀は藤代屋伊助へ頼置候間案事無之候孤子二人一人は伊助方へ差遣候庄松義幼少に御座候得とも若

業を業と可申存寄も有之候は、當時可托者も見當不申候何卒上人より渡邊又藏へ御頼被下悴義世話致被吳候様御見捨無之奉願候此旨上人より外に奉願候人無之候唯生涯不得拜顔而已殘念奉存候恐惶謹言と予此翁の性質年來の交り故能く知りし事なれば不覺落涙に及たり早速此書狀を玄對へ持參しければ玄對も兼て其氣質を知りし故憐れに存し幾重にも引取申して世話可致といはれける故予も喜ひて右庄松へ申遣候處此孤子翁歿後段々懶惰に相成業を繼存寄も見えす様々教訓致ければ後には更に予か方へは寄付ぬ様になりたりなけかはしく存したれとも詮方なかりきさて藤代屋の伊助といへる人は神田柳原土手下富松町といへる處の系屋なり生國下總國藤代の者なり其生質甚素樸なる人にて家産を大切に守り殊の外聖教を信し家産の間は他事なく書を讀經史を常に座傍に置いて讀ければとも一一皆自身の分に當て讀毎の書皆今日其身の

行ひにせんと心掛ける故道を尊崇する事甚厚かりし予か風流の僻ある書畫家の交ある中澤田文次郎東江と號初て入江北海にて逢て久敷知りし人なれとも疏遠にて其人を不盡兩國矢倉といふ所に卜居し高名の人なり龍齋は石町の名主にて傳左衛門といひし者なり此人も交り不厚柘忠兵衛も龍齋と同じく頤齋の門人にして兩國柳橋邊人居しか此人も深き交りにあらず澤田文次郎も初は此輩と同く頤齋門になりじといふ頤齋流を修せし時分板にせし千字文の石摺あり能くつとめて修せしと見えたり後古法帖に依りて風を改められたり平淳徳は淳信の子にて父の風を能修しける此人林家門人となり學寮の並ひに宅を建居けり後は麻布笄橋に移居せり此人も疎遠なり東州左潤字君澤世名文助は無二の交りなり此人衰老まで日夜古人の法帖を修し懈る事なし數十年一日も不怠常に古人に不及を歎せり此人始の名定綱字文紀世

名東十郎といふ平淳信に學と云予初て逢しは傳馬町の新道に居られし時なり尤其時分は頻に放蕩にて有しか其中も修する事は不懈けり後吳服町へ移居し世名忠次郎と改められけり其時分は勤めて修せられき又其後銀坐一丁目へ移住し書日々進にみ専ら唐李邕を本とし古人の法帖を修せらるゝ事にて當時の名家なり牛山は箕田十右衛門といへる人なり小石川御門内に居られし其筆才拔群の人なり甚風流なる人にて時々交り深し赤峯脇田郷大夫といふ人にて火消與力なりしか此人も久敷知る人にて未だ修行も満たざる前角田市左衛門青溪先生にて學問せられし時初て逢たり後一家を成し烏石翁の門人と稱して居られし梟山は織安右衛門とて小石川御門内牛山近邊に居られし此人も古法帖を以て鳴られける華溪は稻葉兵吉とて三井孫兵衛親和翁の門人なり此人は久敷交りにて初め兩國米澤町に居られし時より親く交りたり後神田豊島町

へ移り其後馬喰町一丁目裏通りへト居せられたり生質殊の外柔和なる人にて少も人と争ふことなし甚筆才の有人にて謹みて師の風を改めす能く守られたり人皆其風を改めすして堅く守りたるを稱したり  
廣川董九恕井戸甚介殿當時は大名旗本の内にて名家なり畫は宋紫石に學ひて花鳥専門にて當時の人なり初駿河臺に居られしか後小川町俎板橋へ屋敷替被致たり御子息方も何れも才子にて嫡子は義八郎殿とて著述甚達者也二男は雄三郎殿とて畫を善被致書は東洲相談にて有りけり雪齋曾君選増山河内守殿伊勢長島侯大名にての一人にて風流拔群の人なり書畫ともに直に華人によりて修せらると申事なりしか當時世の中の振合遠慮被致風流家出入も皆斷りにてありき安部攝津守殿武州岡部侯武田安藝守殿高家久世三四郎殿井戸甚介殿皆河内守殿交り厚き友にては有りし雪溪宋紫山紫石の子なり其徒幡溪金龍壽山藍田皆名をなせり寒巖馬孟

熙北山權之助馬良の子なり馬良は久敷名家なり人物山水拔群の名手なり  
梅里山人本所北割下水の先中の郷邊に居られし隱者にて山水を善せられし人なり予も度々尋行て逢たり  
一仙此人は出羽の産といふ伊藤寂照寺月仙の門人にて増上寺前中門前に居られたり  
山東文晁字文吾下谷藤堂和泉守殿後ろ通りに住す田安附の御家人也予久く交りなり初加藤伊豫守殿御隱居被成文麗と申の畫を學ひ後立對芙蓉北山權之助所々へ參り終に大に改り一家をなせり  
梅溪世名鏞木彌十郎肥長崎の産なり濱松町に卜居す當時の名家なり人物山水花鳥皆善す  
嶽洲松平周防守殿大夫にて宮木二郎右衛門と申西京の林周助の子なり

隱居して専ら書を善す丸山主水應の門人にて此風を善せられたり  
芙蓉木文熙世名鈴木新兵衛予之郷人にて信州飯田の産なり初邊漆水に  
學と云ふ後江戸に來り伊勢町に居られしか畫才拔群中にも人物山水に  
善く林家書生となりて著述も達者なる人なりし柴野彦輔推舉にて阿州  
侯の畫官となれり  
玄對邊瑛字廷輝世名渡邊文藏芝森本に住故居を號<sub>ス</sub>林麓草堂今都下此人  
の右に出る者無<sub>レ</sub>之畫家の一人といふ可也山水に善く氣韻骨法實に當世  
の畫宗なり且子男子五人女子三人有<sub>テ</sub>皆其才に足れり長子を忠藏赤水  
昂と云山水に善し二子内田彦藏玄對本姓内田渡邊清水翁の養子と云ふ穀此人  
畫才又及者なし山水人物花卉鳥獸皆善<sub>レ</sub>之三子田琮宗三郎といふ四子文  
吉女子りつ春江と號し皆書を善す五子又吉性書を好み鈴木三郎左衛門  
碧山につきて學へり

蘭石公子名隱字處翁片桐隼之助殿書を玄對に學はる人物に善於其精密  
當時於畫人物は公子の右に出る者無之且齋史善字子辨世名永井直記玄  
對に學ひて山水に善し高橋十五郎名安親字名卿號新川玄對に學ひ花鳥  
を善す其他鶴立齋羽澤廣山翁樂山翁等皆名あり

春田播磨名永年壽鹿堂御具足師にして麴町平川町に住す古實に甚委し  
き人にて篤學なり實に風流の友なり寛政十二年庚申五月廿九日死時年四十八也

洪崖山人元玄對に學後交を絶て隱者となる甚風流の人にて寫生を專に  
し樂まれける

石七藏といふ人あり後章三郎と改名亨字子亨後又名を永貞と改此人幼  
少より予と友たり彦右衛門にて逢たり其時は十四五にて彦右衛門へ素  
讀に行けり父は石井正甫とて醫業にてありき其父も常に彦右衛門の會  
日には見えける故心易く常に往來したり子亨異母の兄二人あり父は本

官人にてや有けん二人の子は與力を勤たりといふ然に此二人生質無頼にて予か心易せし時分は二人共與力の家を滅せし也又其家名を他へ賣讓し也日夜博奕のみ事とし不善せざる事なしと云一人は歌舞妓芝居のものとなり放埒かきりなかりき子亨は幼少より書を讀事を好みて出精せり予も常に厚く交れり扱此人の孝順なる事感するに堪たり一人の無頼の兄佐太郎といひしか悪行増長して其上瘡毒を疾む寄所なき儘父のもとへ來り段々病氣重り腰もたゝす目も盲せんとす子亨此者に事ても意にそむく事なく二便の不淨迄も取りて父母に事と更にかはる事なし段々病氣重り其翌年に死せり子亨心を盡し厚葬けり其後父も逝けり子亨書籍文具をことごとく鬻て心を盡し葬れり其後は母に事て少年に素讀を指南し其日を送りけるか其頃予御小性頭取佐野肥前守殿へ御心易く參り文辭の相談致參らせしに或とき四家雋を會讀せし次手に子亨

事御咄申ければ同伴可致様被申ける故連而參會讀の相手致たり子亨順孝の人故逢毎の人に親まれざるはなし肥前守殿段々子亨の事相噺老母の心を安せさし遣し度抔と申ければ肥前守殿被聞彼若小給を厭ひ不申は召抱可申哉と被申に付右之段子亨へ噺しければ大に喜び肥前守殿家來となれり先老母を安するに足れりとて老母も安堵しけり廼屋敷長屋へ引移りたり又老母の姉なる尼のありしか此尼昔かたきにて甚かたくろしき生れにて有しに久敷已前其夫なる人も死し子とてもなく大姉の大番衆の母にておはせし方へ行て居けるか姪の殿の酒亂にて時々我儘にせらるゝを厭ひて子亨の方へまゐられたり子亨順孝の性なれば困窮の中へ引取事へけり又其節一人の無頼の兄喜八と云し段々放埒不善博奕打はたし時々困窮の子亨方へ無心ねだりに來けり子亨なき中より心一はいに何度も物を遣りけり其後此無頼瘡毒にて目も盲腰もぬけて

子亨の方へ來けり子亨引取介保せし事二年程なりしか其中一つも其無頼の意に違ふ事なく二便の不淨まで取て父に事ふ如にせり人の性の善なるさはかりの無頼無法のものなれとも其順孝に感し死期近くなりし時手を合て涙を流し子亨に謝せり子亨も共に落涙しけり段々病氣重り終に死せり子亨又々心を盡し取しまひ厚く葬りけり其後肥前守殿伯父松平左門殿とて千駄ヶ谷におはせしか子亨の小給なるをあはれみ肥前守殿此順孝のものを知らざるは書を読甲斐なしとて子亨を左門殿方へ引取られ六七年左門殿屋敷に居たり然とも左門殿高千石餘の小家故物入多き中必竟は義氣にて引取られし事當時寄合にて勤も無之に無用の費させ參らするも本意ならずと其後は市中に出て教諭のみにて老母を養居たり

内田叔明といふ人は邊立對の家兄なり篤學の人にて著述は名家といふ

へし性甚酒嗜にて唯酒のみ友とせられし初世名内田平右衛門と云しとなり隠居しては世名は捨て叔明と而已申き立對と同居せられ予も常に交し人なり後自碩石道人と號せられき没後立對の二子其遺稿を集て卷となし醉客漫興集と題せり此人本利名を厭ふ人にて著述其稿をとむる事なし二子常に尋聞て記し置しと云

無幻道人光旒大僧都は聖護院宮の學頭にて知足院と申人也上野國野田といへる所の修驗にて兄を淨正院とて秀才博學の人にて皆人の知る所なり知足院は其性質温和なる人にて都鄙の間知れる人信せざるはなし且傍書を善せられて是又名高し專古法帖を修せられたりと云予か敝院も宮御用にて出府されし時は被訪折々止宿も被致嘶されたり實に博學の師なり予も書を乞ければ柳子厚の東海君を行體にて認められたり卷となして収藏せり

根本雄助といへる人は常陸の産といへり久敷林家の書生にて有しか篤學の人にて歴史に委し且國朝の學に委しく律令格式より國史まで悉く推極られたり然とも其生質名利を厭ふ人にて諸侯より召せとも不應松平右京亮殿より被聞及度々召けれとも斷りて不應林百助殿地面に住けり予久敷交れり八代巢河岸に入塾せし中より常に戸を閉て人に逢す五月盛夏の時といへとも戸閉て居けり予か敝院も數々被訪常に往來せり

予常謂君子は生れなからにして有し學て君子には至るへからず聖人も小人學道易使とのたまへ共小人學道至君子とはのたまはず犬塚唯助といふ者あり酒井雅樂頭殿家來にて有しか父は犬塚又内とて家老を勤たりしか本雅樂頭殿家は御當家代々の舊臣故神祖の御意として上野國厩橋を永代城地に被下他の諸侯は國替所替も被仰付とも雅樂頭殿計

は動きなし名譽の家也と云然るに此又内播州姫路は上國にて物なりも宜敷故頻りに雅樂頭殿へ進め國替被相願姫路へ移られたりと云其子犬塚甚右衛門といふもの重き役義をも勤め居たりしか主人の納戸金多盜つかひし事露顯し出奔せしか詮義し出され刑せられけり唯助其時は犬塚又藏と申せしか右兄の惡事に付放逐せられたり書を讀む事を好し故林祭酒の門人となり聖堂へ入塾し妻子は身寄の方へ頼置たりさて聖堂様子改り安原三吾は藤堂佐渡守殿文學となり引移平澤五介は異學と申事にて退塾致に付林家の方は片瀬作右衛門都講被申付聖堂の方は平井直藏と犬塚唯助兩人にて都講被申付ける然るに此唯助其生質阿諛佞媚のものにて松臆學職の時は自ら門人と稱し膝下に屈し其外勢ひある人には頻りに阿諛しけり聖堂振合改り其身經事被申付しより古舊をば捨て土の如くしける故にくまさるものなかりき又其後聖堂大に革り浪人

書生不殘退塾被申付兩人も退塾しけるか唯助は學職の時より松平右京亮殿へ出入せし故本郷邊に卜居し右京亮殿家來と申居けり又先達而雅樂頭殿屋敷を放逐せらしは兄の罪故にて其身罪なき故年歴たれはとて出入をゆるされ折々參りける松臈は雅樂頭殿甚御信仰にてしはく被參ける故唯助も度々同席せしかは松臈此頃咄されしに人は時々變するもの也此間姫路侯へ參りたりしに犬塚唯助も參りたり昔聖堂入塾せし時は我か門人なりと自ら稱して叮嚀に師事せり然るに此間逢し時は甚不遜にて朋友よりもあし様にあしらひ甚敷非禮なりしと被咄けり松臈は生質直なる人故唯助變したりと被思とも本より阿諛佞媚反覆表裏のものなり井金峨あるとき被申し事あり女子讀書費と予此言を以て思ふに聖人も女子と小人とは畜難しとのたまへり豈女子乎小人讀書費と云んもかならん彼か姓犬塚とは名實相叶といふへし搖尾索食かな

天明六年丙午七年丁未天下大に飢饉し都下米價錢百文に付三合五夕なり間餓死するものあり陸奥出羽兩國殊に甚敷餓死人山野に充滿せりといふ予天明六年市中に寓居せしか其春正月廿日に湯島天神表門前より出火し風烈敷火先深川洲崎まで焼ぬけたり夫より日夜の別ちなく十度も廿度も有けるか凡正月廿日にはしまり二月廿三四日頃迄毎日毎夜の火事數日如此打續く事古來なしと云へり予元より東西南北の身なれとも都下一統さわかしき事なれば心の安き事こそなかりきあまりのとに近國に暫く遊んと思ひけるに何もかも皆焼し故漸古衣一つ身は夜具の儘なれば心易き方にて取計ひ兼て相摸國蒲賀といへる所に淨誓寺とて知れる人の有に尋行茲にて暫く儒書杯講し既に四月にもなりければ都下も靜になりたり歸れよと友の方より申越けれとも其うちに又藤澤の驛より招ける人のありければ又も遊んとして浦賀を出て藤澤に行ぬだん



物習人の出て來ける故佐藤隆仙といへる醫者の方にそ居けるか夏も過る事を怠れ程なく初秋になりぬるに人々の集る所なん用意せんとて皆々かなたこなたかけあるき遊行寺の下の川端に涼しけなる家を借りける故茲へ移りけるか七月初めより雨打續き降りて日夜止む時なし既に十五日十六日は洪水出て所々山崩れ川湧き藤澤驛も民屋半流れたり予か方にも物習ふ少人の二三人居たりしか十六日の夜餘りに騒かしければ出てみよとて火を點し窺はせしか此家元より外より地面も高くし又家も高く造れりし故案事なく居しなり然るに少年水かさを見て礎までは五六尺も可有と申けるか常には礎より下石かき水きはまでは二丈餘もありける然は最早増事も有まし寢よとて臥ぬ扱十七日になりて戸を開き見ければ此夜まで五六尺も間のありしといふ水今朝はそろくと礎の上へ乗れり夫に驚き少年に早く書籍取集め文房のもの取納る中

早ゆか下へそろく及ぬいそき外へと出しに平地早二尺餘に一面に充満しける故衣を高くからけけれとも臍に及ぬ漸々にして遊行寺の門へたどり付一息して振歸り見れば予か居し家半は水に入たり今すこし遅かりせは溺て魚腹にや葬られぬらむそれよりやうく遊行寺の山へ登り遙に道をまはり隆仙方へ参りたり此時都下も大水にて有し故こゝにては溺て死せしかしこにては流れたりと沙汰せし故予も藤澤にて溺死せしと江戸にて友とちの聞しとて石七藏心切の人故予か生死をも聞たゝしてんと態く藤澤迄尋ね訪れし互に大に喜ひまつく歸り可申とて兩人連立て歸れる道すから子亭嘶されしは中仙道上尾宿に予か伯父なる人のありて先に行て遊へり土地質撲にして物習ふ人もかれこれあり上人遊ひたまはすやと嘶せし故道法はわづか九里計なれば先足下と共に行んと約せしに其冬子亭の宅にて上尾の人子亭の従弟なる人仙右

衛門に逢て行ん事を約し其翌々年天明八年戊申春子亭と共に初て上尾に遊びぬ子亭四五日滞留して歸りぬ予又々教諭を初めしに物習人彼是來て日々教へけり其中武平次碩茂字なる人は久敷書を讀けるか此人子亭にも學ひしことありし故一日談すらく古昔は郷學ありて一郷の人皆參りて學へりしとそ其の今に残れるは下野足利學のみなり是は小野篁の建たまひしと云今天下文運時を得たり何卒郷學を此地に建んやとありけるに碩茂大に喜ひ即ち物習ふ人々に咄し合幸ひに天満宮の舊地の有けるを此處こそとて相談速かに極まりしか此のとき既に七月八日なり予乃ち法衣を脱して碩茂と唯二人草のむらがりしげれるを分け入りなざかりければ皆々大に感し我もくくと立出一兩日の中にきれいになりしそれより地形をせんと予も土を運ひける故皆々出精緻し又四五日の中に地形の様になりたり扱各手にくく槌杵様のものにてかたはしより

打かため我等は柱を建ん我等は梁を上んとて忽に材木數十本集りたり其中に工みなるは役者にせん杯談せしに本村といへる所に彌太郎といへる工の有けるか此事を聞來て申けるは此度有難き館の建候よし承りぬ何卒職分の冥加に手間寄進仕たし遣ひ給てと申中壁塗男の有りしか是も手間寄進仕たしと出來ぬ予も餘りの事に扱く私なき事はかくも人の心に感するもの哉と難有覺しそれより材木は澤山に出來ぬ足利學に習ひ四間四面に建たりしに又屋根葺者の近村に在しか兩人參りて是も手間寄進したしとて來りし故七月八日に草をかり初めにし地を同廿二日に柱建し九月中頃には早落成しける此事かなたこなたへ聞え近村隣驛より物習ひすとて予を招きけり扱此事を早速林祭酒へも聞せ參らしければ大に感せられたり其頃聖堂の都講は市川小左衛門にて有しか此人へ頼みければ承知被致祭酒へも被申上予へ相談被致聖像は恐れあ

れは神祖の學は宋朝學にてまします故朱文公こそよからめとて廻ち  
朱文公と天滿宮とを配食し奉り祭酒より二賢堂といふ額字を送られて  
早速に彫て掛ぬ小左衛門も被參十一月至日を以て釋奠の定例と定め先  
つ遷座し奉り夫より至日に小左衛門祭酒となり郷生參り首尾能禮と  
のへり扱小左衛門常祭式一冊を綴り不朽の格として送られたり是本子  
亭の勧めよりせし事故子亭も喜び遷坐釋奠共に勤めけり扱二賢堂の前  
に門を建泰喬門と號し額は小左衛門被書たり其前に塾を置き聚正義塾  
と號し釋奠の時は神供所とし常には物習ふ人の集り學ふ所とす毎月朔  
望には驛の少年近村の民皆來て宿役人讀法御定目を一讀  
聞かするなり其後予孝經  
よりはしめ大學近思錄の類講之皆々有難しとて喜びぬ予後光明寺住務  
せしに今に上尾宿の郷生たえす來て少年輩の常に塾に集り學ふ事を咄  
せり文政六年癸未春今祭酒に相願ひ二賢堂前へ碑を建つ

享和元年辛酉四月五日松臈關君長先生物故す時七十五なり同九日品川  
海晏寺後地に葬

享和二年壬戌七月廿三日廣川董九如卒せらる

松岡平二郎といふ人は有馬中務大輔殿の有職にて職分よりして古實甚  
精しき人にてありきいろ／＼板本にせしもの多き中に公邊へさはる事  
ありしにや御尋にて申譯立けれとも五十日計り主人へ御預被成遠慮い  
たし謹み居けるか事なく御免ありき

柏木門作名は昶字永日自號如亭もとの名謙字益夫といへり小普請方御  
大工棟梁にてありけるかすくれたる才子にて詩を善せり予從來の交り  
なり始は市川小左衛門相談にてありしか當時出藍の作家なり享和二年  
壬戌十二月落髮し如亭を以て行はる

海保儀兵衛と申人は字子迪先生の門人にて廻角田彦一なり老先生の弟

子なりしか家督を其弟一兵衛彪也十へゆつり浪人し姓も本姓故海保と名乗名は鶴字萬和と改中國處々遊歴いたされ大坂に卜居し後京都に移り専ら文章を以て世に知らる著述は文法披雲三卷あり誠に古今の文章の眼目をひらかれしと申事なり

馬場萬休老人は馬場三郎左衛門殿とて御使番を勤められ高は二千石餘屋敷芝長井町なり御子息は馬場大助殿とて享和壬戌年冬西丸御目付被仰付たり萬休老人は軍談好にて神祖の御事には殊に吟味届き自ら軍談せらるゝに實に能辯にて懸河灑水令聽者生喜怒憂悲事也予近邊故時々往來して甚心易く出入せり

享和三年癸亥春二月四日梅溪平世胤死養子庄藏は市川小左衛門二男にて即畫業を繼家も益さかりなり

北山信有山本喜六金峨の門人にて博覽書として見さる事なし有名の人

なり

鵬齋龜田文左衛門同しく金峨の高弟にて當世右に出る者なし實に名家なり

大田直次郎南畝と號す博覽の人にして元御徒士衆なり後御勘定衆に轉風流の人にて雅俗に通し世界名を知らさる者はなし文政六年癸未四月六日七十五にて終れり

甲州郡内の森島子與世名彌十郎名は其進予と同しく林祭酒正良公の門に入て聖

堂入塾して勤學せり殊に予と交互に切磋せり其後相訪べき約をなしける故寛政中子與を郡内谷村に訪行ければ子與大に喜ひけり且子與を香花寺新倉里正福寺は予か從兄なる故彼是と一年餘遊ひ居たり其中江戸より人來て西の久保光明寺に住すへき事を告げ進む予は生涯隱遁して情を山水と俱にせんとと思ふ故承知せさりしに子與も正福寺も頻りに進

めて一度は佛祖の給事をも致し候か本意ならんと様々に申し且子與は豪家の事故入院の費は皆助けくれぬ依之止事を得ず任務せり扱其後瀧川安藝守殿甲府勤番頭被仰付彼地へ參られ本此人毛利伊勢守殿公子にて伊勢守殿は學問執心にて天下に聞へし藏書の家なり安藝守殿も其兄弟故學問も勤められ就中著述好きにて詩の聞へある人なり此節林家にて諸國の國誌を集めらるゝ事始り甲斐誌を安藝守殿集んと發起いたされ都下より書生を招きたんく古跡等尋始められしか小國とはいへ一國の事なれば中々速に知るとかたし依之郡内領の方角をは子與に被申付扱安藝守殿任滿ちて歸府被致其跡へ松平伊豫守殿被仰付始の友之丞殿松臈關先生の門人是亦勤學の人と申且安藝守殿よりも右之旨被申送し故大に世話も行届ける子與は郡内領三萬石の中の事歴古跡詮義に懸り先富士山より始日々奔走し數年にして成就し四五拾卷の著述となれり實に生涯の苦

心なり右之分即公朝へ捧け御褒美被下廻官庫に納らる文政四年十月十三日死去す時年六十歳

同鄰驛に小佐野和泉守といへる社人有此人篤學の人にて遠近に名を知らる號柿園著述も孝經注大祓古説等有り性質直の人にて一も私意なく郷人悉く尊信せり一日或人來て告げるは此間何者か社内の樹を盗み切取者あり役人へ御届御詮義可被成と申き柿園被申は御知らせ被下辱存候乍然氏子の中の者の致事なれば強て答るにも及す若是を答候は、外の山にても切取間敷もしれす左様なる時は答人となり可申間御聞捨に可被成候様頼候と答ければ其人も大に感しける此事其樹を盗みし者傳へ聞て大に恥ち樹を切事を止けるとなり予も子與か宅にて度々逢柿園の方へも訪たるに甚た謙遜家にて學問の咄の外は黙々として無言なり實に君子といふべき人なり子をは大和守といひ才子にて又勤學の人な

りけるが三十に満すして早逝しぬ其後柿園も物故致されたり門人多かる中にも郷人なる渡邊榮兵衛といへる人勤學にして并ふ者なく今なほさかりに教諭しつゝ門人にさへ出精する者少からすとなむ予か十二三の時の事を思ひ出せし儘記し置ぬ信州善光寺の在に堀村といふ所あり此所に長命寺といへる宗門の寺に實に目出度事は十七世皆學僧にて相續せり十七代目を證高師とて此人篤學の人にて内外典に通せられたりといふ予は逢さりき其門人に指月と申人飯山の蓮證寺といふ寺の住持にて有けるかころしも中秋の事にてありし此年雨しげく十五夜の月も曇りけるか其時證高師の無月の作とて見せられしを思ひ出せしまゝ記し侍りぬ

中秋無月

雲覆南樓素影空。

謝莊此夕賦難工。

神女似妬<sub>二</sub>仙娥面<sub>一</sub>。

暮雨朦鎖<sub>二</sub>朧月宮<sub>一</sub>。

豊島豊州先生世名豊島終吉始字子迪先生の門人にて性直剛直の人にて勤學及ふ人なし文章の事に付山形大貳と心安くせられしかは大貳御咎に相成闕所の節書翰等有し故御疑懸り其身御旗本の事故未部屋住にて有しかは外に子細なしといへ共禁固被仰付たり其後年歴て御免に相成本中岡姓にて有けれども公邊を憚り豊島と變姓致されたり親父を中岡半十郎と申廼嫡孫にて繼ぎ中岡金十郎とて此人にて家督は濟たり此人も早逝にて金十郎殿子息の幼少なるを後見致し本の屋敷は八研堀にて有しか屋敷替にて牛込火の番町に住はれたり此人大根機の人にて書として見ざる事なく字子迪流の穿鑿好にて著述も多く有り文學正路を始め論語新注豊子筆談等なり舊友に篤き事肉親の如くにて著述毎に一部つゝ贈られ且存寄もあらは遠慮なく可申吳と度毎に被申事眞實にて

かきりなかりき

此者雲室道人筆記の稿本なり予か同藩小田切敏は道人の晩年の友なりしか遊歴中觸目の真圖一冊此冊子をみよとて贈られ人しにいくほとなくて道人寂せられければ遺物となりて小田切氏に傳へたるをその子息にかりて寫しぬ

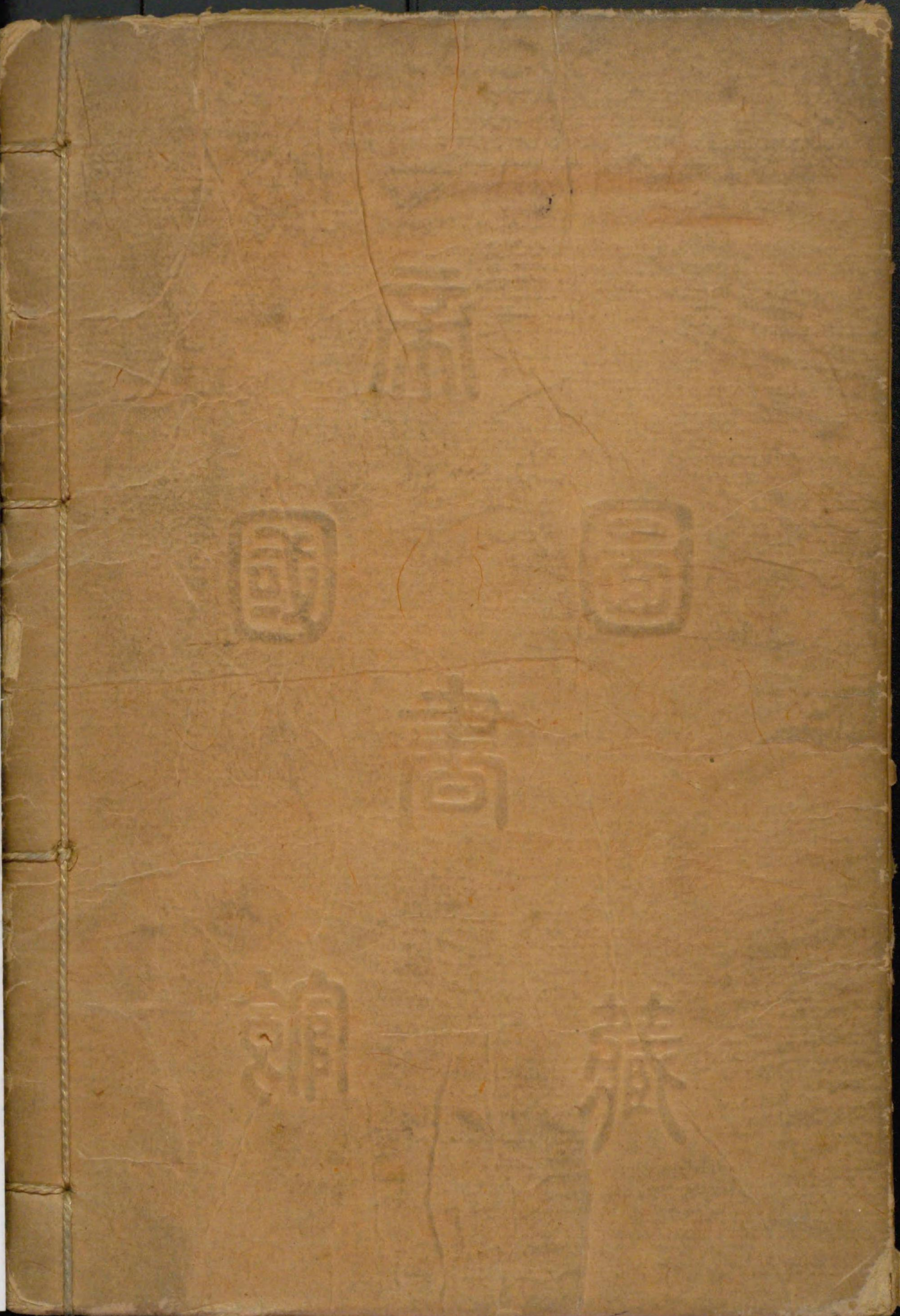
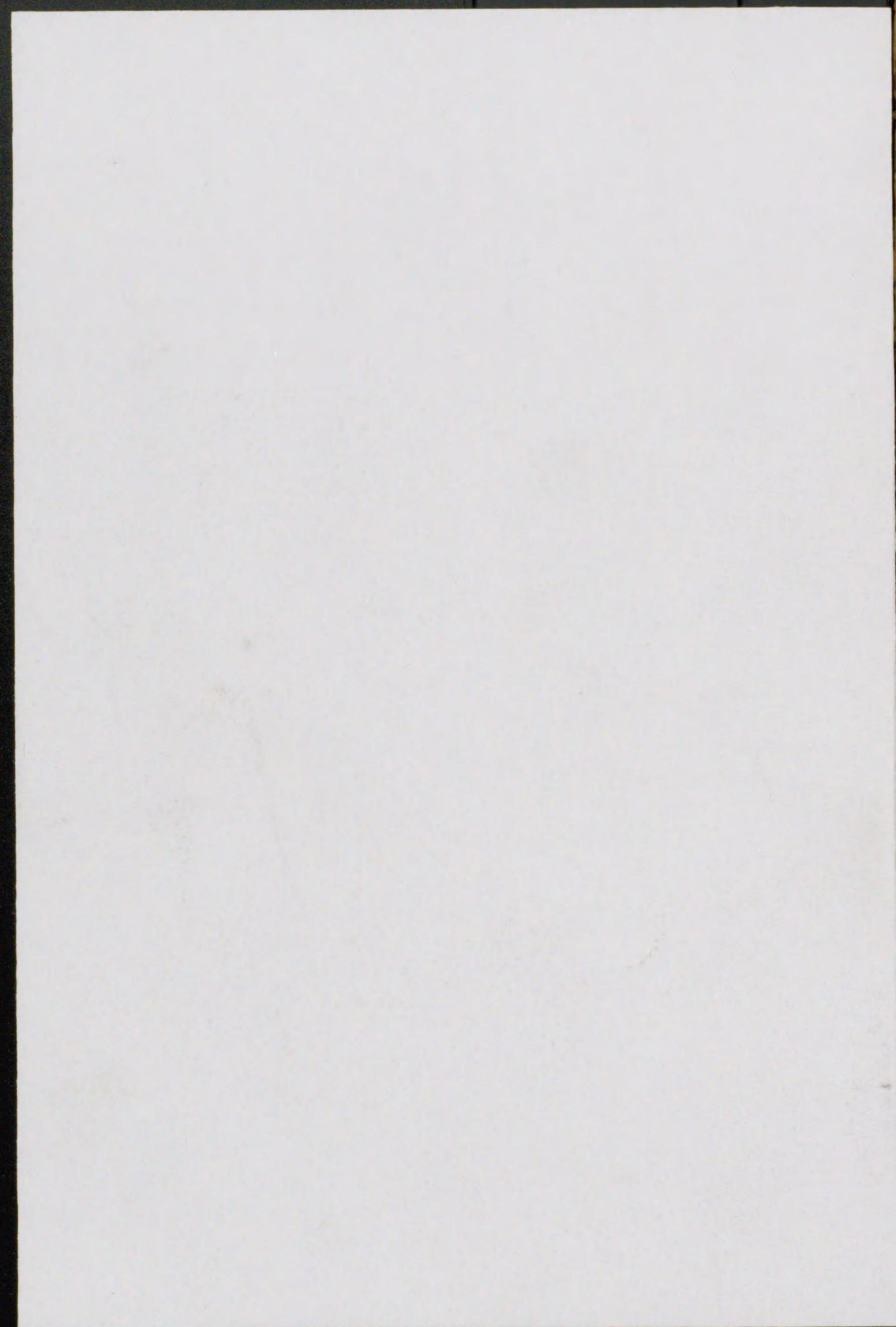
安政六巳未のとし七月

花 押

雲室隨筆終

198  
430



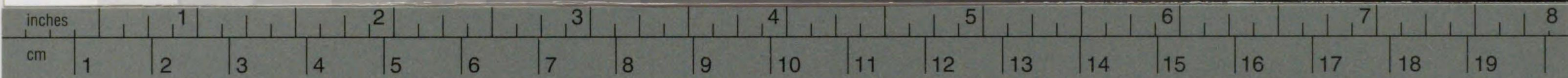


# Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

**A** 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



# Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

